

看護職部門

猪さがし

【神奈川県・佐藤れい子^{さとう}】

看護職部門
入選

戴帽式が済み、実習に出たばかりのころ、昭和20年代の忘れられない体験である。愛と奉仕を胸に、ナースとして知と技を修得するため、初めて病室に入るのに「いかがですか」と微笑みかけるのも、緊張と不安の連続だった。4人の受け持ち患者の中に、白血病のSさんがいた。どんな病気なのか、あわてて図書館で調べた。

当時の医学書には「白血球が腫瘍性増生し血中に遊出し、六カ月以内に100%死亡。原因不明、高熱を持って発病…」とあり、死期の迫った病人にどんな看護をすればいいのか途方にくれた。完全看護とは言え、Sさんの母親は毎日着替えを持って来て、汗ばんだ寝間着を替え、脱脂綿を指に巻き息子の口の中をぬぐう。Sさんは赤ん坊のように母のなすがままにしている。私はこの母の看護に打たれた。

「父親が戦死した後、兄ちゃんは家族のために、頑張りすぎたんです。米軍基地の土木作業は賃金がいいと、番担ぎを夏休み中やって家計を助けてくれたの。この熱に猪のおもちゃがあれば…」

「猪って何ですか」私は聞いた。

「心配でハ郚見(はっけみ)にみてもらったら“猪が病を食ってくれる”と言われて。探しても、どこにも売ってなくて」と漏らした。

「母さんたら、猪で熱が下がれば、医者も薬も要らないだろ」。Sさんは乾いた唇をとがらせた。私には、慰めようもなかった。

勤務後、猪さがしに寮を出た。デパートや狸小路のおもちゃ店にもなかった。「猪をお見舞いだなんて聞いたこともない」と笑われた。雪舞う中を歩きながら、看護の何かも分からないが、Sさんの母の心情に打たれ、その心に寄り添い、病苦が軽くなるよう祈っていた。そして十二支に猪がいると気づき、薄野の民芸店へ急いだ。店のおばさんに尋ねると猪の置物があると出してくれた。千円といわれた。当時、学資金として月に八百円支給されていた時代だ。持ち合わせでは足りず「残金は月末支払う」と頼む私を信じてくれた。のし紙をかけてもらい「祈り」と書いた。その足で眠っていたSさんの枕元に届けた。